千葉明徳短期大学保育創造学科　2015年2月号

月歩学歩

“月日を歩き、学んで歩く”　明徳の「今」を伝える月刊誌「げっぽがっぽ」

一年のまとめ

平成26年度が終わろうとしています。卒業、あるいは進級を前に、それぞれの学年では、各授業での発表や実習など、ここまで学んできたことの成果を問われる機会が多々ありました。もちろん、これらは通過点であり、それぞれの学びはこれからも続いていきます。けれども今、一つの集大成として、学生たちは何を思うのでしょうか。

今月号では、次のステップに向けて節目を迎えた学生たちの姿をお届けします。

特集　学びの成果発表会

（P.２－５）

１年生の２月（P.８）

「ただいま保育実習中！」

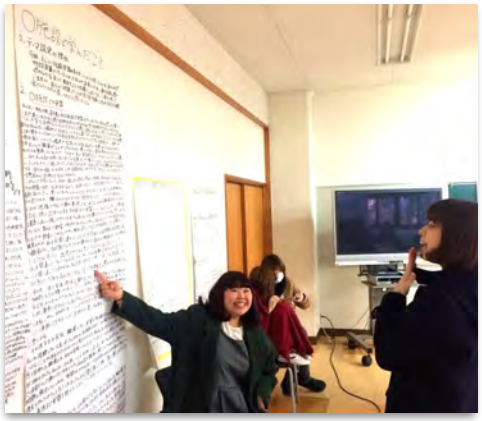
２年生の２月（P.６－７）

「現代社会論を終えて」

教員からのおすすめ（P.９）

!hot news!　今月の明徳速報（P.10－11）

特集　学びの成果発表会



What Have YOU Learned?

２年生の学びの集大成と言える「学びの成果発表会」を２月13日（金）に行いました。この成果発表会では、各ゼミの特色が強く表れていました。

２年生の皆さんが、この明徳で学んだ成果を自身でも実感し、達成感を味わう会であったでしょうか。また、１年生の皆さんが、来年度の自分の学びに希望と期待を抱く会であったでしょうか。

この発表会を担当されている金先生からのご報告です。

「学びの成果発表会」を終えて

金 瑛珠

今年度で５回目の開催となりました「学びの成果発表会」は、初めて学内にて行われました。例年、各保育方法演習（通称・ゼミ）単位（＊編注：５P参照）で、一年間のゼミの取り組みを発表し、また、個々人の卒業レポートをポスターで発表する形式で行われてきましたが、今年度は、“どのような発表にするのか”ということからゼミ毎に相談をしてもらい（学生同士、または、教員も含む）、その発表の方法（形態）を決めるところから２年生にとっての学びの成果発表会の準備がスタートしました。

その結果、講堂にて全体発表を行ったゼミが４つ（全体に向けての発表＋各教室に発表ブースを設けたゼミが４つ）、そして６つのゼミは各教室等をブースとして展示型や参加型のゼミを計画しました。全てのゼミが、自分たちの取り組みを他者に発表するために工夫しながら、ゼミ毎に当日まで準備を進めました。２年生にとっては、発表会当日は、他のゼミの内容に刺激を受けたり、自分たちの発表の仕方を振り返り、様々なことを考えさせられたりする一日となったようで、一人ひとりの感想文には前向きな気持ちが綴られていて、頼もしいと感じました。終了後、提出してもらったコメントシートには、①自分たちのゼミ発表の感想、②他のゼミで印象に残った内容についてのコメント、③その他、を書いてもらいましたが、ここでは②③について一部を紹介したいと思います。

「全体発表・個人発表を終えて」（２年生）

・参加型の発表なので、いろいろなゼミが今までにやってきたことを実際に体験することが出来てわかりやすかったです。クラスが分かれていて場所の移動が少し大変に思ったけど、良い学びの発表会だったと思いました。

・ゼミなりの発表の仕方、まとめの仕方が様々で、面白かったです。あまり他のゼミがやっている内容を知らなかったので、話し合いの内容も、ゼミの雰囲気も様々だなと感じました。自分の活動内容を伝えたいのに伝えるのがうまくいかず、伝えたいという気持ちだけではだめだなと感じました。

・授業が終わる実感がない。今になって、もっと学びたいと思った。

例年、２年生と準備を進める段階で感じることですが、卒業を間近に控えた学生たちは、発表会の準備を進める際、一年前の今の時期、自分が１年生として参加した時のことを思い起こし、１年生にとっても実りある内容になるためにはどうすべきか、を真剣に考え、話し合いをし、準備を進めます。この視点をしっかり持ちながら今年の２年生は発表方法の検討から一つ一つ準備を進めてきたといえるでしょう。中には、もう一度発表するならば…という視点でコメントシートを書いてくれた学生もいました。この発表会はこの日で終了しましたが、この発表会で感じたことが、今後、必ず活きてくるでしょう。また、２年生のコメントの中には、時間が短かった、という意見もいくつか見られました。

一方で、今年の学びの成果発表会の最大の反省点は、１年生の参加者が少なかった、という点です。事前より、学生からは、「どの授業の出席になるのですか？」という質問が多々ありました。何度か１年生にアナウンスをしてきた中で、学事日程一覧に載っている学校行事であり、１年後の自分の姿をイメージしながら、一年間、どのような学びをしていくかを考えるきっかけとなる一日にしてほしい、という願いを伝えてきたつもりでしたが、最終的には参加者が少なく、最も反省すべき点となり、また、最も残念に思えた点となりました。

しかし、参加した１年生の感想には、「一年後、先輩たちのように保育の話をあそこまで深く出来る自分になれるのか、不安ですが、楽しみになりました！」と書かれていたものがあり、１年生にとっても有意義な一日となり得たことが伝わり嬉しく感じました。１年生用コメントシートには、①全体発表に対する感想、②各時間帯で印象に残ったゼミへのコメント、③その他、という項目を設けました。一部をご紹介したいと思います。

「全体発表に対して」（１年生）

・一年だけの違いで、こんなに違うとは…。頑張るきっかけになった。

・前に出て自分の意見を述べるのは難しいのに、すごく堂々と話しているのがとても印象的でした。発表の形式から自分たちで決めて、様々な発表の仕方があったのに、全てのゼミがわかりやすく興味をもてる内容でした。

・どのゼミも、“このゼミが好きだ！”という思いがすごく伝わってきました。田中ゼミの発表はとても印象的で、見ている方も楽しいと感じました。

・ゼミの先生によってやることが全く違う。将来を見据え考えてゼミ選択をするべきだと思った。

・いろいろなゼミに参加して、自分の考え方、視野が広がったと思いました。一緒に先輩と参加して、先輩との距離も縮めることができ、来年の自分たちは、先輩方のようになりたいと思いました。

会場の変更、発表方法の見直し等、はじめての試みも多かったため、反省点や課題もたくさんありましたが、２年生が二年間考え、学んできたことを、各ゼミらしく発表する姿、慣れ親しんだ教室で空間をうまく利用しながら発表する姿、発表に向けて準備をしてきた姿からは、学内で発表会を行うことの意義を考えさせられました。来年度以降、どこで行うのか、どのように行うのか、学生の皆さんが毎年、自分たちの経験をベースに、内容をバージョンアップさせていく姿に刺激を受けながら、教員も真剣に検討を行い、また、来年度の計画・準備をしていきたいと思っています。

２年生の皆さん、お疲れ様でした。一人ひとりの学びがこれからも続いていきますように…。

１年生の皆さん、来年は皆さんが自分たちの学びをまとめて発表を行うことになります。期待しています。

テーマ	担当
実習体験から描く子どもの暮らしと子どもの姿	箙 光夫
遊びに対する保育者のかかわりについて考える	由田 新
保育を社会的養護の現場から考える	山野 良一
ことばという方法	深谷 ベルタ
“子ども理解”と“援助”について考える	金 瑛珠
保育実践論	小久保 圭一郎
子育て子育ち支援～地域・保護者・子ども・学生それぞれの″育ちあい″を考える～	石井 章仁
人的環境としての保育者（私）を考える	片川 智子
保育における身体表現活動の探求	田中 葵
保育者とは社会の中でどのように生きる大人なのかを考える	伊藤 恵里子

＊４月当初、シラバス掲載時のテーマです。

２年生の２月

明徳の卒業必修科目の一つ「現代社会論」は、現代社会を構成する様々な要素とその現状、要素間の相互関連性について理解を深める授業です。学年全体で行う「総論」と、教員ごとに設定したテーマで行う「各論」とに分かれます。自らの興味・関心から「各論」のコースを選択した２年生は、時には「現場」へと足を運びながら、同じコースの仲間たちと一年間かけて、自分たちの現代社会における「立ち位置」を考えてきました。

その成果を報告する発表会が、１月13日と20日の２週にわたって行われました。学生たちは、この授業で何を学び、何を感じたのか...共にこの授業を受けてきた助手のお二人に語っていただきました。

「現代社会論」を終えて

私が学生時代の中で一番印象に残っているのは現代社会論です。各論、総論を通して、今まで見えていなかった世界が広がると同時に引っかかる物ができた授業でした。しかし、それが社会人になり経験を積むにつれ、その引っ掛かりが様々な所でつながっていき驚きました。

助手として明徳に戻り、二年間アシスタントも含めて先生方と関わってきましたが、様々な分野の先生方が集まり、明徳の学生の様子から現代社会論の方向性について真剣に議論し柔軟に変えていく姿を目の当たりにして、こんなにも学生の事を考えて下さっていたのだと改めて感じました。

総論のテーマは「自分たちの立ち位置」でした。各論ごとに一年間何を学んだか、そこから見える自分たちの立ち位置を３週にわたり報告とディスカッションを行いました。報告やディスカッションを聞いていると、伝えたい事が上手く伝えられず言葉に詰まる学生、各論の報告に対してその報告はどうなのかと疑問を投げかける学生など、その学生の個性が面白いほど見えました。しかし、ディスカッションでは報告の本質ではなく表面的な所に議論が集中してしまった様に思え、何か違うという物足りなさを感じました。

私が思う現代社会論は「人としてこの先どう生きていくのか」という自分自身の軸に触れ、必然的に考える授業だと思っています。この２年間私自身の環境が大きく変わりました。その環境を原因にして、現代社会論から逃げていた部分もあります。しかし、先生方の生きざまを感じ、情けない話ですがやっと目が覚めました。「この先、誰と手をつないで生きていくのか」。去年の総論で箙先生が言っていた言葉がずっと引っかかっています。自分に残された時間の中でちゃんと向き合って行こうと思いました。

宗川 早苗

テーマ	担当
日本の不平等を考える―無縁社会・ホームレス・子どもの貧困	山野 良一
芸術を教育・福祉へ	明石 現
現代社会と群れの暮らし	西網 覺雄
現代社会と都市	植野 一芳
子ども家庭福祉	小木曽 宏
消費生活と手仕事	加藤 次郎
現代社会の中の犯罪―同じ社会に生きる者として	金子 重紀
現代社会と環境	帰山 俊二
サウンドスケープ：音との対話　自分との対話	よしなか あつし
現代社会と関係する方法	渡辺 泰子

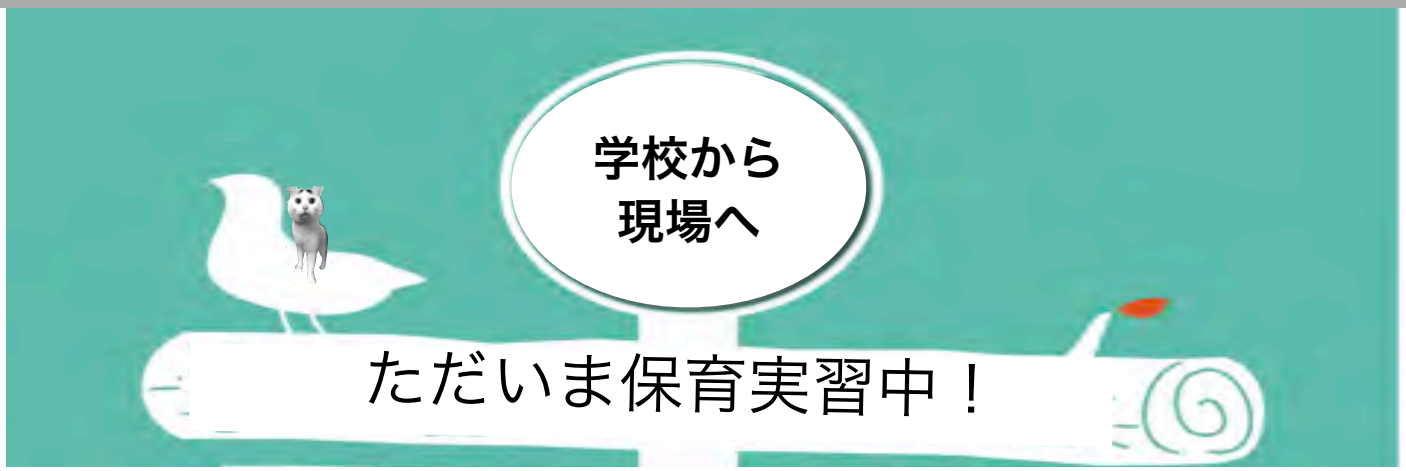
二年間の現代社会論を終えて思うことは、ようやく自分の意思で選び、そして自分の足で進み始めることができるということです。社会人になってから、新幹線のように毎日が高速で過ぎていき、そのスピードに逆らうことができず、置いて行かれないように必死になってついていきました。そう過ごしているうちに、「（保育の仕事をする自分や周りに流されて生きている自分に対し）本当にこのままで良いのだろうか？　自分が本当にしたいことってなんだろう？」と問うようになりました。

短大に戻ってきて現代社会論の授業に入り、学生と共に授業を聞きながら過ごしているうちに、新幹線のようだった日々が快速電車になり、各駅停車になり、自分で振り返ったり、立ち止まって考えたりする時間ができるようになりました。学生の時に、他者とどう向き合っていくか、また「ゆさぶり」の中で自分がどう考えていくのかと先生から耳にタコができるほど問われてきました。短大に戻って来てからは先生からではなく、自分で自分を「ゆさぶる」ことができるようになってきたと感じますが、同時に、他者にとらわれてしまい、自分と向き合うことができていないということに気付きました。

自分で問い、様々な角度から考え、自分の中で答えを選んでいく。答えは一つではないけれど、その時、自分が何を考え、選択していくのかというのは、実は学生のうちから言われていたことでもあります。その時は、言われていることが理解できなかったけれど、今、こうして実感として分かるようになったことは、この二年間、現代社会論で学ぶことができたおかげだと思っています。目の前に分かれ道ができたとき、自分がどう考え、どの道を選んで進んでいくかは仕事をする上でも、生きていく上でも逃れられないものだと思います。そうしたときに、逃げずに向き合う大切さをこの授業を通して学びました。

東 沙也加

１年生の２月



１年生の２月は実習三昧！　保育所と施設で２週間ずつ実習を行っています。

２月12日には、前半の実習を終えた学生とともに、実習事後指導を行いました。本学の実習事後指導では、小グループ（学生10名程度＋教員）で行う“ふりかえり”を大事にしています。ふりかえりでは、どのような保育所・施設で、どのような子ども・利用者と関わり、どのような体験をし、どのようなことを感じたのか、みんなで話し合い、学び合いました。

保育所実習を終えたOさんは、子どもとの関わりよりも職員との関わりについて戸惑い、悩むことが多かったようです。しかし、それを決してマイナスとしてとらえず、自分の振る舞いや行動を省みたり、そのことが自分にとってどのような意味があったのかを真剣に考えたりしていました。この話を受け、後半に保育所で実習をするＩさんも、職員との関わりに不安を持っていましたが、気持ちを切り替えて実習をしようと勇気が湧いたと言います。Ｉさんの実習先を訪れると、とてもいい顔で実習をしている姿がありました。

また、Mさんは、前半の保育所実習で「最後まで自分と子どもとの間にある壁を感じた」と話していました。ふりかえりをともに行っている周りの学生の意見や感想から、「自分から関わろうとしなかったことがその要因なのではないか」と考え、後半の施設実習では積極的に利用者さんに関わることを目標にしました。そして実習中は、前半の実習で学んだからこそ、自分の行動を意識し、目標を見失わないように心がけているようでした。

このように、多くの学生が、前半の実習とそのふりかえりで学んだことを生かそうとしていたように思います。自分の課題や目標に向き合う誠実な姿勢を見ることができ、とても嬉しくなりました。

３月にはすべての実習を終え、学生たちが学校に戻ってきます。一人ひとりからどのような体験が語られるのか…楽しみにしています！

教員からのおすすめ

PROFILE

教員名

やすつね かつのり
安恒 克則

担当

学生支援室室長、入試募集委員、キャリアデザインⅠ

メッセージ

３月は、旅立ちの季（とき）であり、別れの季でもある。人は出会えば必ず別れるもの。しかし、別れても、本当に結び合った関係ならば、互いの心にきっと温かな何かが残るもの。出会った人の心に温かな足跡を残せる人になってほしい。特に、“先生”と呼ばれる皆さんには。

＊編注：写真は安恒先生の幼少期です。

本学図書館には、各教員の専門分野や関心が一目瞭然の「推薦図書コーナー」があります。この連載では、その一端のみならず、教員から皆さんへの「おすすめ！」を紹介していきます。
今回は、安恒先生から皆さんへのおすすめです。

「23分間の奇跡」
著：ジェームズ・クラベル

1981年の出版というから、もう30年以上前に出版された本である。日本語版は1983年に、作家にして元参議院議員・都知事、ドラマ「意地悪ばあさん」でも有名な青島幸男氏の翻訳により出版されている。出版直後に読んだので、詳しい話は忘れたし、短い話なので詳しく話すと読む興味をなくしてしまいそうなので、疎覚えの筋を少しだけ。

戦争に敗れたある国の小学校（だったと思う）に戦勝国の若い女教師がやってきて最初の授業を始める。時刻は９時である。子どもたちは、当然、初めはそれまで敵国だった国の教師を警戒する。しかし教師は、巧みなレトリックを駆使し、それまでの国や国旗への忠誠心を捨てさせ、新しい国の指導者への信頼を植え付けていく。最初は女教師の言葉に懐疑的だった子どもたちも、次第に違和感を持たなくなっていく。違和感を覚える生徒は数人になり、最後は主人公の少年１人となる。そして、その１人もついに違和感を覚えなくなり、間違った考えを抱かぬよう、彼女のいうことを聞いて勉強しようと思うようになる。その時、時計の針は９時23分を指していた。

この本のことをなぜ今まで覚えていたかというと、この本を読んだ当時、私は企業の人事に勤めていた。そして、会社を受験に来た元教員志望の女子学生との面接の際、この本の話になり、感想を聞くと「教育の持つ力に感動した」という答えが返ってきて、ぶっ飛んだ覚えがあるからである。この本を思い出すとき、いつも一緒に思い出す映画がある。古いアメリカ？映画で、名前も筋もそれほど覚えていないのだが、あるシーンだけをはっきりと覚えている。西部のある街が、何らかの町を二分する問題で対立し、話し合いを行っていた。紆余曲折（と言っても中身は覚えていないのだが）を経て、皆がある方向でまとまり最後に確認の評決を採ると、全会一致かと思いきや、一人の男が「俺は反対だ」と言う。確か物語では、中心的な人物ではなく、端役だったと思うが、その理由を問われて彼は、「全員賛成じゃ、民主的じゃないからな。」と答え、話は皆の笑い声の中で、ハッピーエンドとなる。

この２つのお話、皆さんはどちらが健全だと感じるだろうか。私は、後者を選ぶ人が多数であってほしいと思う。教育と洗脳の境目は常にあいまいである。過去に、「私は、私の考えを布教している」のだと言って憚らない先生がこの学校にもいた。教育の力は大きい。特に、批判力の乏しい幼少の子どもたちには（だから、毛沢東もポルポトも子どもたちを利用した）。だからこそ、幼い子どもに関わる保育者には、手をつなぐことの大切さを教えながらも、皆が一つの考えに染まることの恐ろしさに敏感であってほしい。「23分間の奇跡」、ぜひ保育者にお薦めの一書である。

！hot news！

new movements of this month in meitoku

！今月の明徳速報！

43回生　HOME COMING DAY！

２月21日（土）、昨年度卒業した43回生が集う「Home Coming　Day」を開き、互いの現状、喜びや悩みを思う存分語り合いました。このような会が、皆さんの明日への活力につながることを願っています。２年生の皆さん、卒業後はこのような会がありますので、ぜひいらしてくださいね！

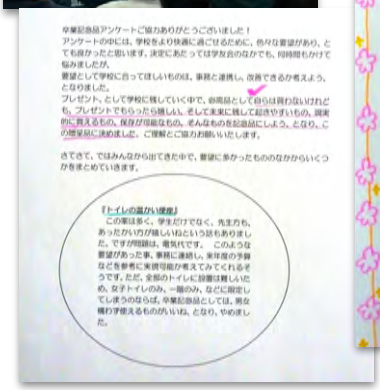
♪Silent Sounds♪

-　–朱い花 a scarlet flower -

-　！CD完成！

明石現先生による、芸術と福祉の心をつなげる授業「福祉の音プロジェクト　～手話合唱でコンサート～」で取り組んできた合唱曲を収録したCDが完成しました。興味のある方は、明石先生にお声かけください。

44回生卒業記念品「ブランコ」を中庭に設置！



卒業記念品アンケートご協力ありがとうございました！
アンケートの中には、学校をより快適に過ごせるために、色々な要望があり、とても良かったと思います。決定にあたっては学友会のなかでも、何時間もかけて悩みましたが、
要望として学校に合ってほしいものは、事務と連携し、改善できるか考えよう、となりました。
プレゼント、として学校に残していく中で、必需品として自らは買わないけれども、プレゼントでもらったら嬉しい、そして未来に残しておきやすいもの、現実的に買えるもの、保存が可能なもの、そんなものを記念品にしようとなり、この贈呈品に決めました。
さてさて、ではみんなから出てきた中で、要望に多かったもののなかからいくつかをまとめていきます。

『トイレの温かい便座』
この要望は多く、学生だけでなく、先生方も、あったかいほうがいいねという話もありました。ですが問題は、電気代です。 このような要望があったこと、事務に連絡し、来年度の予算などを参考に実現可能か考えてみてくれるそうです。ただ、全部のトイレに設置は難しいため、女子トイレのみ、一階のみ、などに限定してしまうのならば、卒業記念品としては、男女問わず使えるものがいいね、となり、やめました。

たいせつなおしらせです
今年（44期生）の卒業記念品が決まりました!!
中庭にもっと人の集まれる場を作るという事で、
150kgのものまで大丈夫です
木のブランコを
寄贈することに決めました!!
一緒に組み立てましょう
組み立て日は2月25日10:30～ です!!!!

44回生の卒業記念品は「木のブランコ」です！　学友会が２年生全員へ卒業記念品についてのアンケートを取ったところ、さまざまな案が出ました。その中からこれに決まった理由について、掲示板では次のように説明しています。「決定にあたっては学友会の中でも何時間もかけて悩みましたが（中略）、プレゼントとして学校に残していく中で、必需品として自らは買わないけれども、プレゼントでもらったら嬉しい、そして未来に残しておきやすいもの、現実的に買えるもの、保存が可能なもの、そんなものを記念品にしようとなり、この贈呈品に決めました。」「木のブランコ」には、「中庭にもっと人の集まれる場を作ろう」という願いが込められているのです。

２月25日（水）、ブランコ設置当日は、大工部顧問の得重さんのお力を借り、ブランコの組み立てや設置する地面の整備、さらに、「たいむ」の方々がこれから子どもたちと草花を植えられるようにと花壇の整備も行いました。お昼はみんなで作ったシチューをほおばり、午後は「たいむ」から来た子どもたちと共に遊びました。
たくさんの人のたくさんの笑顔が中庭にあふれますように！という願いは、早くも叶っているように思いました。この先もっともっと笑顔があふれますように！

MEITOKU SNAP

卒業記念品のブランコには、当日の組み立てに参加した多くの学生と教職員が試乗した後、「たいむ」の子どもたちも楽しみました。花壇は、授業や学校行事で製作したものが活かされています。これからの季節、ブランコに揺られながら中庭に咲く花を眺めるのもいいかもしれませんね。

明徳の３月

1日（日）

・千葉市家庭的保育者研修

7日（土）

・一般入試

15日（月）

・第44回卒業式

18日（水）

・入試・面接試験

21日（土）

・第50回スターバックスお話ライブ

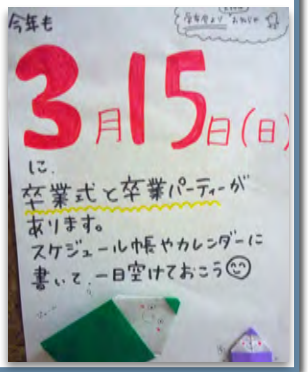
28日（土）

・オープンキャンパス

編集後記

「光陰矢のごとし」ということわざを引くまでもなく、短大での日々はあっという間に過ぎていきます。保育実習に臨んだ１年生、そして現代社会論の発表会や学びの成果発表会を迎えた２年生の心情は、まさにそうだったのではないでしょうか。

さて、３月はついに卒業式です。発表会の準備とほぼ同時進行で、２年生はアルバムやパーティー、そして今月号で紹介した記念品の設置など、卒業に向けて様々な企画をしてきました。学校生活をリードしてきた２年生が卒業すると思うと寂しくなります。けれども、素敵な学生たちだったからこそ、この先巣立っていく社会で、一人ひとりが輝く日々を送ってくれることを願ってやみません。そう思える学生たちと出会えたことは、教員にとっても幸せなことだと思います。（髙森）



★INFORMATION★

明徳HPの「めいたんブログ」でも、明徳の「今」を日々発信しています。ぜひご覧下さい。

http://chibameitoku.blog53.fc2.com

発行：千葉明徳短期大学

千葉市中央区南生実町1412

Tel :043-265-1613

Fax:043-265-1627

mail:tandai@chibameitoku.ac.jp

URL:http://www.chibameitoku.ac.jp/tandai.html

編集

田中 葵

伊藤 恵里子

髙森 智子

読者の皆様へ：『月歩学歩』に対するご意見、ご感想を郵便やメールにてお寄せ下さい。